

女神とゾンビ

『サイボーグ宣言』の前夜とその後から考える

田中 雅一*

田中： 田中雅一です。これから「女神とゾンビ『サイボーグ宣言』の前夜とその後から考える」ということでお話ししたいと思います。

ダナ・ハラウェイ(1944-)が「サイボーグ宣言」(ハラウェイ 2017 [=Haraway 1985])で批判的に論じている点は三つあります。一つは、マルクス主義あるいは社会主義的なフェミニズムについてです。この場合、「批判的」というのは「拒否」ではなく、「さらに展開しよう」というふうに理解できます。もう一つは、「ラディカル・フェミニズム」という視点です。最後に全く引用文献が出てこないですが、「エコロジカル・フェミニズム」批判という理解が良いと思います。ラディカル・フェミニズムについては、男性の欲望の対象になるような、性的に搾取されるような女性、社会主義的なフェミニストにおいては労働する女性、労働者としての女性という観点で、私たちに理解を促しているわけですが、エコロジカル・フェミニズムにおいては、その中心になっているのは女神であると理解しています。

そこで、「宣言」の最後に、「同じスパイラル・ダンスを踊っている」、あるいは、それに巻き込まれているのなら、「女神というよりはサイボーグとして含まれたい」(ハラウェイ 2017: 348)¹という文章があります。

これが何を意味しているのかというと、スターホークの『スパイラル・ダンス』という書物をはっきりと批判的に論じているわけです。

そこで、最初にスターホークを紹介します。スターホークは、——これはもちろん本名ではないと思いますが——ロシア系ユダヤ人の両親の下で育った女性で、1951年生まれ、70年代後半にアメリカで盛んになってきた女性の霊性運動(Women's Spirituality Movement)、反核運動、あるいは女性だけではないですが、ネオ・ペイガニズム、さらには、ウィッチクラフトなどの宗教的フェミニズムの中で非常に重要な役割を果たしてきました。こういう様々な運動を含めて、広い意味では、エコロジカル・フェミニズムの運動に関わってきたと言って良いと思います。

* 京都大学人文科学研究所教授(発表時)。本稿出版時現在、国際ファッション専門職大学国際ファッション学部教授。

¹ “Though both are bound in the spiral dance, I would rather be a cyborg than a goddess.”
(Haraway 1985: 101)

スターホークの最初の著書に『スパイラル・ダンス：偉大な女神を祀る古代宗教の再生』(スターホーク 1994 [= Starhawk 1979]) があります。これは日本語では鏡リュウジさんたちが訳しています。そこでは自然との交流や性的なエクスタシー、それから地球を女神として捉える視点が非常に強調され、男性中心の世界や近代主義的世界の批判、キリスト教批判に対するアンチテーゼとして女神崇拝が提示されているわけです。

スターホーク自身は1968年、彼女が17歳の夏にカリフォルニア州の海岸を野宿しながら放浪していたという話が出てきます。

自然と自分との新たな結び付き、すべてが生き生きと性欲に満ちあふれ歓喜のダンスを踊っていること、自分もその一端を担っているということ (以下略) (スターホーク 1994: 6)。

彼女自身はUCLAの人類学を出ています。年齢的にはちょっと離れていますが、カスターネダの後輩に当たります。彼女自身が、大学時代に幾つかの儀式を創出したり、リズムに乗ってトリップしたり、集団で瞑想した、と書いています。そんな中で女神との邂逅があります。

女神信仰は私に新しい展望を提供した。いまや私の肉体——乳房、陰門、子宮、月経——すべてを含む私の女性としての肉体は神聖なのだ。今まで否定され貶められてきた野生の力や性の悦びが、まさに表舞台に躍り出たのである (スターホーク 1994: 7)。

20歳の頃にスターホークは、ハンガリー出身の有名な魔女、Z.ブダペストに出会って、23歳のとき、1年間かけて自転車で北米各地を回ることを決心します。

さて、本書のテーマは、地球は神聖であるということです。具体的には、地球というのはガイア、あるいは女神だというふうに述べています。このスパイラル・ダンスというのは大自然と全ての文化に去来するエロチックな生命のダンスということで、アニミズム的な考えに基づくものです。自然の世界や文化にはエネルギーがあふれていて、私たちは、木々や草花、岩石、海などの自然だけでなく、本や絵画、詩や音楽、友人などとも親密な交わりを行うことが可能になる。

スターホークは、この女神崇拝の中核原理として、内在性、相互連携、それから、共同体の三つを挙げています。

内在性は、地球上のあらゆる生物や物体には女神や神が内在していることを意味します。これは、一神教に対する批判です。自然や文化はみな神聖とみなすわけです。相互連携というの

は、一人ひとりが相互にこれら神聖なものと結び付いていて、一つの宇宙を形作っているという状態を意味します。共同体は、女神信仰を中核とした共同体が具体的にすでに現れているということを指します。複数の共同体が相互に連繋して、地球全体を覆っている。その時、私たちは初めて地球を自覚し、これを守ろうと思う。要は、自然を保護するという使命を感じることができるのだと、述べています。

引用します。

女神がわれわれのなかに、そしてわれわれの周囲にあまねく内在することを知れば、われわれは女神と出会い、成長、闘争および変化をもたらすために共同体を構成し、愛と悦びの行為を女神の儀式とすることができるようになるのである(スターホーク 1994: 22)。

スターホークだけに限りませんが、フェミニズムの中でもスピリチュアリティ(霊性)、や宗教を強調する人たちに対しては、当然ながら政治的な視点が欠如しているとか、政治的運動に関与していないという批判がなされてきました。これに対しスターホーク自身はそうではない、と否定しています。たしかに女神崇拝者たちも決して政治運動に関わってこなかったというわけではありません。

ダナ・ハラウェイの「サイボーグ宣言: 二〇世紀後半の科学、技術、社会主義フェミニズム」(ハラウェイ 2017) は、1985年に *Socialist Review* に掲載されました。「サイボーグ宣言」は、どちらかというとも男性と女性の差異を最小化する(ミニマイズ)という視点で男女の平等を実現しようという主張です。スターホークを代表とするエコロジカル・フェミニズムは、むしろ男性と女性の違いを強調(最大化、マキシマイズ)して、両者の補完的な関係を主張する視点です。

ハラウェイ自身は、サイボーグというのはハイブリッドであるとか、私たちはサイボーグであると述べます。このような主張には、「この衝撃のなさ」と言いたいところです。それから、サイボーグとは、ある種の自己であるとも述べています。「私たちはサイボーグである」という主張が繰り返されています。

サイボーグはポストジェンダー社会の存在として、3つの境界が崩壊する地点に位置します。まず、人間と動物との境界が崩れている。サイボーグは、人間と動物の境界が侵犯される、まさにその地点に位置し、神話に立ち現れるのだと述べています。次に、人間と動物を含む生物と機械の間の境界も崩壊していく。最後に、物理的なものと物理的でないものとの間の境界も崩壊していく。こういう形で、ハラウェイは既存の人間を構成している境界が崩れていくところにサイボーグという新たな人間像を認めているわけです。

フェミニズムという視点が永遠に部分的な存在であることは、政治の組織化や政治参加のかたちとして我々が期待する内容に対しても影響を及ぼさずにはおかない。我々は、よく働くために、全体性を必要としてはいない。共通言語というフェミニズムの夢、完璧に誠実なかたちで経験に名称を付与する夢同様、全体化を指向する帝国主義の夢に他ならない。その意味では、弁証法も夢のことば——矛盾を解決せんと希求する夢のことば——である。反語的ではあるけれども、ひょっとすると、動物や機械と融合する過程を介して、我々は、いかにして人間たらざりうるか、——いかにして、西欧のロゴスが具体化された存在としての人間ではないかたちで存在しうるか、——について学ぶことができるかもしれない。こうした有力かつ禁断の融合の過程における快樂という、科学やテクノロジーの社会関係によって必然化された視点に従えば、フェミニズムの立場にたった科学が存在する可能性はおおいにある (ハラウェイ 2007: 331–332)。

この引用からもおわかりのように、動物や機械と交わること、フュージョン (融合) することから私たちは学ぶことができると主張します。では何を学ぶのでしょうか。彼女の答えは「いかにして人間たらざりうるか (how not to be Man)」であると。西洋的なロゴスを身体化しているような人類あるいは男性にならないことを学ぶのだと述べているのです。

ここで大事なことは、ハラウェイは、古典的な人間存在の境界をかく乱する意味で、他者として表象されてきた動物と機械を出してきているわけですが、もう一つ、大事な概念がロゴスです。Man とはあくまで理性的存在と理解できます。それが人間の本性でありまた理想でもあったわけですが、サイボーグという概念を通じてそうじゃないことを学ぶことができるのだ、そうならないことを学ぶことができるのだと主張しているのです。もう一箇所類似した文章を引用します。

サイボーグのポリティクスは、ことばを求める戦いであり、完璧なコミュニケーションに対する闘い——すべての意味を完璧に翻訳する一つの暗号という男根中心的で論理中心主義のセントラル・ドグマに挑む闘い——である。であればこそ、サイボーグのポリティクスはノイズに固執し、汚染を擁護して、動物や機械との非抽出子の融合に歓喜する。こうしたことは、大文字の男性と女性に混乱を持ちこむような接合のしかたであり、欲望——ことばやジェンダーを生成する存在として想定されている力——の構造を覆し、ひいては自然と文化、鏡と目、奴隷と主人、からだと心といった「西欧」アイデンティティ再生産構造やモードを覆す (ハラウェイ

イ 2007: 337)。

もう一つ彼女が述べているのは以下のような傾向です。それは、自分たちを被抑圧的な位置に置くことで、「普遍的な対立構造」を立ち上げてしまうことです。これを批判するためにもサイボーグという視点が必要なのだと。これはどういうことでしょうか。

サイボーグの視角という、「我々」が有する被抑圧という特権的な位置——他のあらゆる支配関係を包含し、単に暴力をふるわれる存在であるという無垢性を内包し、より自然に近い存在であるという理由づけを内在しているような位置——にポリティクスの基礎を置く必要性から解放されたパースペクティヴから、我々は力強い可能性を見てとることができる (ハラウェイ 2007: 337-338)。

要は、サイボーグという概念を導入することで、暴力あるいは差別の被害者というのとは別の視点から自分たちを位置付けることができるのだと主張します。

フェミニズムに話を戻すと、ハラウェイは、サイボーグという概念によって社会主義フェミニズムやラディカル・フェミニズムとは違う視点、すなわち「サイボーグ・フェミニズム」という視点を提案します。

これらに加え、最初に私が言いましたように、彼女にはエコロジカル・フェミニズムへの批判が認められます。これについてははっきり述べていませんが、関連するような箇所をいくつか引用しておきましょう。

一つは、英国のグレナム・コモンに集まる女性たちについてです。彼女たちは、この町にある基地に核を搭載できる巡航ミサイルが配備された時に反対運動をしていた人たちです。なお、これについてはジル・リディントンの『魔女とミサイル：イギリス女性平和運動史』(リディントン 1996) が出ています。「サイボーグ宣言」を引用します。

こうした機械(巡航ミサイル)を阻止するうへでは、移動してきた不自然きわまりない存在たるグリーンナムの女性たち——権力のサイボーグ網を上手に読みとってしまう女性たち——が実践する魔女の織物活動の方が、古い男性至上主義ポリティクスの好戦的な労働者たちより有効である (ハラウェイ 2007: 294)。

労働者としての運動よりも、こうしたエコロジカルな視点からの魔女たちの運動のほうが有効であると述べているわけですから、ハラウェイはこの引用文でそれほど批判的とは言えません。もう一つ引用します。

皮肉なことではあるが、アジアでチップを製造したり、サンタ・リタ刑務所でスパイラル・ダンシングを踊っている不自然きわまりないサイボーグの女性たちこそが、構築された存在としての一体性／団結によって、有効な抵抗戦略を導き出す存在なのかもしれない(ハラウェイ 2007: 295)。

何を言っているのか分かりにくいかもしれませんが、この文章には、サンタ・リタの刑務所の中で反核運動のためにスパイラル・ダンスを踊っている人たちが、今度はサイボーグの女性たちに匹敵する、というような含みがあります。

三番目の引用ですが、これは彼女の現代社会についての理解の仕方です。

ことは「神」の死にとどまらない——「女神」も死んだのである。いや、神も女神も、マイクロエレクトロニクスとバイオテクノロジーのポリティクスに彩られた世界に復活したのだろう(ハラウェイ 2007: 312)。

そして、すでに紹介しましたが、本宣言の最後の文章に、スパイラル・ダンスに巻き込まれるのであればサイボーグのほうが良い、という主張が出てきます。

以上、『サイボーグ宣言』について、とくに女神運動(スパイラル・ダンス)との関係で検討してきました。次に、『サイボーグ宣言』を意識した Sarah Juliet Lauro と Karen Embry による「ゾンビ宣言：ノン・ヒューマンの条件」(Lauro and Embry 2008) という論文を吟味します。著者によればこれは、『サイボーグ宣言』への批判というよりはオマージュだとのことです。

まず、最後に少し女性の話も出てきますが、彼女たち自身が必ずしもフェミニズムとかジェンダーを意識した宣言ではないということを断わっておきます。また、たまたま最初のご発表にありましたスウォーム、これもゾンビの一つの形態ということで(Lauro and Embry 2008: 88) 2、偶然ですが、このワークショップのキーワードになるのではないかと思います。

私たちは、この妖怪(specter)が100年以上もアメリカ人の想像力を捉えてきた理由を考察したい。私たちは、ゾンビ(zombie)が人間的／亡霊的(ontic/hauntic)な存在として有効であることを示唆するために、それをより深

² “...the zombii, a consciousnessless being that is a swarm organism...” (Lauro and Embry 2008: 88)

く観察したい。ゾンビとは、多くの人びとが論じようとしているグローバル資本主義以後の人間性 (humanity) とは何なのかという、社会歴史的な現代におけるもっとも当惑すべきことがらのいくつかについて語りかける存在なのである (Lauro and Embry 2008: 86) 。

ここで著者たちは、なぜゾンビを考えたいのか、アメリカ人の想像力を捉えてきた亡霊みたいなものを何で議論したいのか述べています。

ここで一つ大事なのは、先の引用ではあえて人間と亡霊とそれぞれ訳した *ontic* (存在的) と *hauntic* (取り憑いている) という二種類の存在のちょうど中間に位置するのがゾンビだということことです。

以下、「ゾンビ宣言」の説明になりますが、ゾンビはサイボーグと異なり、私たちを解放する主体ではない。これに対し、ハラウェイは、サイボーグを単にポストヒューマンという形で捉えるのではなく、まさに現代の後期資本主義社会から人類を解放する一つの道筋として位置付けています。それから、もう一つ、「ゾンビ宣言」の著者たちが強調しているのは、サイボーグになるということは私たち自身が意識しなければいけないということです。ですから、サイボーグは、ロゴスを否定されても意識まで否定される存在ではありません。それに対して、意識のない存在としてゾンビを考えるべきであるし、こちらの方がポストヒューマンとして適切なのだと述べています。

「ゾンビ宣言」では *Zombi*、*Zombie*、*Zombie* など、日本語だと全部同じようにしか読めませんが、ゾンビを三つに分けています。最初は *bi* です。次が *bie*、最後は *bii* というように区別されています。

Zombi は、もともとハイチで民族誌的に描写されてきた存在です。歴史的、民族誌的存在です。それは、死んだ人が生き返って——生き返るといふか、立ち上がって、——そしてサトウキビ畑などで働き始める。これは、まさに奴隷的な存在を表す。つまり、生きている間も奴隷であったけども、死んだ後も主人の言うなりに、疲れも知らずひたすら奴隷として働く。ハイチにおいては、フランス革命直後の 1791 年に、農民による反乱があって、フランスの軍隊を追い払うという事件があります。この農民たちの反乱の記憶もゾンビの表象に含まれている。隷属と抵抗の両方がゾンビ表象に認められるというわけです。こうした人類学や歴史学の対象となってきたゾンビを「宣言」では *Zombi* と称します。日本語で手に入る文献には、ウェイド・デイヴィス著『ゾンビ伝説：ハイチのゾンビの謎に挑む』（1998）があります。

民族誌的なゾンビが、欧米の民衆文化に侵入し、普及・展開していくわけですが、私自身の関心からすると、フェティッシュの歴史を思い出します。

つまり、15世紀にポルトガルの商人たちが西アフリカで「発見した」崇拜物がフェティッシ

ユと名付けられ、さらにオランダやフランスに逆輸入されて、今ではフェティッシュ、フェティシズムという言葉が一般化する。ゾンビについても類似の展開が認められます。さらには、フェティシズムがフロイトやマルクスに影響を与え、独自の展開が生まれたように、ゾンビも心理学的な領域での展開が可能かもしれません。興味深いことに、ゾンビ・エコノミー、ゾンビ企業という言葉もありますね。

民族誌的なゾンビは、映像作品ではクラシック・ゾンビ、2番目の映像で慣れ親しまれているゾンビはモダン・ゾンビと呼ばれます。ゾンビは意識がない群衆となって人を襲い、襲われた人が次にゾンビとなるという点で、意識のある吸血鬼と区別できます。クラシック・ゾンビでは農場の労働者のイメージが強かったわけですが、モダン・ゾンビは工場で働いたり、人間を襲う際にはショッピングモールだったりして、現代的な大量生産や消費社会と密接に結び付いて描写されています。いくつか引用します。

人間性は、個人的な意識や個性のあるエイジェンシーによって定義される。精神のない肉体は人間以下(subhuman)、つまり動物であるということである。エイジェンシーのない人間は、囚人、すなわち奴隷であるということである。ゾンビはこの両方を兼ね備えていて、私たちの過去、現在、未来を告げている／予告している(Lauro and Embry 2008: 90)。

ゾンビには意識もエイジェンシーもないのです。

感染を拡大し、消費するというゾンビ像は人間性とその負債を他者に転移しようとするという事実を説明している。また、ますます問題視されている感染症の恐怖も説明する。純粋な消費の恐怖にかられて、ゾンビは、抑圧状況を共有しない人びとに感染しようとする。すなわち、ゾンビは他のゾンビを攻撃しない。ゾンビはその負債を転移しようとするのである。しかし、その結果は、同じ状態の増殖でしかない。ゾンビは他者に転移することで一人たりとも回復しない。したがって、ゾンビは再びカタルシスの可能性を抑え込むのである。人間と奴隷との境界があることで、人は必要な負債を他者に移すことができる。古代ギリシャ社会であれ、今日のグローバル資本主義の上位構造であれ、そうした境界が存在したが、今これがゾンビによって脅かされているのである。ゾンビに好みはない。全て奴隷となるのである。(中略)したがって、現代の映画におけるあくなきゾンビはこの種の社会批評を具現しているし、資本主義の怪物的な未来を予示する(Lauro and Embry 2008: 100)。

この引用によると、主人は、その負債を奴隷に負わせています。しかし、ゾンビはそういう形を取りません。ゾンビは自分が負債になっていて、同じ負債をさらに味わわせるように新しいゾンビを生み出して行くのです。そこには純粹な消費主義が認められます。人間に嘔みついてどんどんゾンビを生み出して行く過程に嚴密な意味での生産は存在しません。ゾンビはゾンビを生産しているだけなのです。ゾンビがどんどん他者をゾンビにして行く動きは、資本が資本を生む現代の資本主義に対するある種の批判になっている。

最後に、「ゾンビ宣言」が提案しているポストヒューマンとしてのゾンビについて説明します。著者たちによると、これは意識のない存在で、群がる有機体が唯一ポストヒューマンとして想像できるゴースト(亡霊)です。すなわち、意識が欠如しているというのがサイボーグとは違う。群というあり方は個性を否定します。これもサイボーグとは異なります。加えて、サイボーグを論じる際に使用されるハイブリッドという表現も、機械と人間、人間と動物といった対立を超えてはいないと「ゾンビ宣言」では指摘しています。

「ゾンビ宣言」の著者たちは、ゾンビに匹敵する存在を幾つか挙げています。それは自身の生存を医療機器に依存している人や、はっきりとは書いていませんが、アウシュヴィッツの囚人たち、特に回教徒と呼ばれるような死を待つだけの存在、こういう人たちのことを、まさに生きるゾンビだという言い方をしています。

藤田直哉の『新世紀ゾンビ論：ゾンビとは、あなたであり、わたしである』(2017年)では、民族誌的なゾンビとアメリカの映像に現れてくるクラシック・ゾンビに加えて、特に今世紀になると、意識を持ち、しかも素早く動くゾンビが出てきたと指摘しています。それは群というより流体だと。この流体も、また現代社会の在り方というものを反映しています。

まとめます。

人類学の存在根拠として、異文化を知るだけでなく、異文化を知ることによって自らを理解しようという主張がなされてきました。そのためには、人類学はつねに異なる存在を必要としている。これに対して、他者を手段として位置付けるのはおかしいのではないのか、という批判が想定されます。そもそも、異文化を知ることで自文化をよりよく理解できるという主張は、なぜ日本と関係ないような場所にわざわざ行くんだ、そこにどんな意味があるんだ、という批判に対する回答だったと思いますが、これがまた別の視点から批判されているわけです。

今日私が紹介した女神、サイボーグ、そしてゾンビをポストヒューマンという視点で論じる場合には、もちろんそこでは現代社会批判あるいは現代社会理解という目的から提案されているわけです。とはいえ、これらは、他者というより私たち自身が将来こういう存在になる可能態として提示されていると思います。そこが、自己と他者との境界を前提に異文化を知ることによって自分たちを知るという従来の文化人類学的な見方、空間的な「迂回の思考」と大きく異なり

ます。

最後に、いろんなところですでに引用しているクリスチャン・ボルタンスキーが若い時にパリの人類博物館を訪ねた時の印象を紹介しておきます。

[五月革命に続く時代は] 民族学、人類博物館、そして日常生活用品の美の発見の時代でした。もうアフリカ芸術だけが問題ではなかったのです。・・・(中略)・・・人類博物館はわたしには大変重要でした。わたしがそこで見たのは、小さな、壊れやすいとるに足らない品々が入っている大きな金属の枠からなるガラスケースでした。「野蛮人」がそんな品々を操っている黄ばんだ写真が一葉ガラスケースの隅にしばしば置かれていました。ガラスケースはどれも失われた世界を呈示していました。写真の野蛮人は、明らかに死んでいたのです。彼が握っていたものもう無用でした(湯沢 2004: 18)。

私も昔人類博物館に行きましたが、当時はそんな感じでした。こういう文章だけ読みますと、博物館というのはひどい所だと、ボルタンスキーは避難しているように見えます。アフリカの人たちを野蛮人扱いしている、あるいは、死んだような存在にしている。つまり、博物館の他者表象が批判されていると考えてもおかしくありません。今、博物館がやっているのは、どちらかという、そういう批判を乗り越えてフォーラムというような形で運動しているわけですが、ボルタンスキーはこういうふうに言っています。

人類博物館は巨大な遺体安置所に思われました。わたしたちはこの博物館で終末を迎えるのだと思ったのです(湯沢 2004: 18)。

つまり、ボルタンスキーはここで私たちと野蛮人を対比させるのではなく、私もこの中に入っていくのだと捉えているということです。それは、今日紹介した女神やサイボーグ、そしてゾンビ、こういう存在に対する著者たちのスタンスと非常に近いものです。それが人類学にとって何を意味しているのかということこれから考えていきたいと思います。

参考文献

- Lauro, Sarah J. & Embry, Karen. 2008 “A Zombie Manifesto: The Nonhuman Condition” in *boundary 2* 35 (1): 85–108.
- スターホーク, デイブ. 1994 『聖魔女術—スパイラル・ダンス (魔女たちの世紀)』(鏡リュウジ・北川達夫訳) 国書刊行会. (=Starhawk, Dave. 1979. *The Spiral Dance: A Rebirth*

一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究 16 「human/non-human interface」
ワークショップ「アフター・サイボーグ」
2018年2月3日（土）一橋大学東キャンパス第3研究館3F研究会議室

of the Ancient Religion of the Great Goddess. San Francisco: Harper & Row.)

デイヴィス, ウェイド. 1998『ゾンビ伝説：ハイチのゾンビの謎に挑む』（樋口幸子訳）第三書館.

ハラウェイ, ダナ. 2017. 「サイボーグ宣言」『猿と女とサイボーグ——自然の再発明（新装版）』（高橋さきの訳）pp. 285–348、青土社。（=Haraway, Donna. 1985. “A manifesto for Cyborgs: Science, Technology, and Socialist Feminism in the 1980s” in *Socialist Review* 15: 65–108.）

藤田直哉. 2017『新世紀ゾンビ論：ゾンビとは、あなたであり、わたしである』筑摩書房.

湯沢英彦. 2004『クリスチャン・ボルタンスキー：死者のモニュメント』水声社.

リディルトン, ジル. 1996『魔女とミサイル：イギリス女性平和運動史』（白石瑞子・清水洋子訳）新評論.

付録

質疑応答（一部抜粋）

A: いつも考えさせられる話をありがとうございます。単純な質問ですが、ゾンビとしてスパイラル・ダンスを踊りたいのか、どっちなのでしょう。これは割と重要で、それに対する興味というもあるし、逆に言えば、ハラウェイみたいにしたい。僕自身は迷ってしまいますけど。田中さんは。

田中: 多分、swarm と関連するような気がします。つまりスパイラル・ダンス自体が swarm の世界で、そういう中でももしかしたら一番似合っているのはゾンビかもしれない。

久保: 僕からも良いですか。今日のご発表で女神とサイボーグとゾンビという 3 つ出てきたと思いますけど、サイボーグに対する女神の関係というか、ハラウェイのスターホークに対する関係と、「ゾンビ宣言」「Zombie Manifesto」から見るハラウェイのサイボーグ概念と、体制批判というのがありましたけど、ゾンビと女神の関係というのが、何でスターホークから始まるのかというのが結構気になっていて。ある種、ああいった、ガイアでみんな踊ってエクスタシーみたいな話と、ゾンビの話って、多分感覚的につながっているところがあると思います。ゾンビと女神ってというのは、どう関係付けられると思われませんか。

田中: 私の知り合いでゾンビの研究者の方が来ているので、何かありますか。私よりは多分詳しいと思います。

福田: 京都大学の福田*と申します。ご指名ありがとうございます。

ゾンビと女神の関係ですが、それはまだ私にもはっきり分からないのですが、今、田中先生がおっしゃったように、ゾンビは確かに 3 種類存在して、ハイチの時のゾンビの映画もあるし、ロメロの「ドーン・オブ・ザ・デッド」（邦題：「ゾンビ」）に代表されるような資本主義社会の消費者たちを皮肉ったようなゾンビたちもあります。2002 年以降のゾンビは違うというか 2002 年以降のゾンビは、走るゾンビなど、いろいろ存在するので、それまでのゾンビとはかなり違います。ただ、どの時代のゾンビ映画に関してもなぜか女性のゾンビというのが出てくるんですね。

* 福田安佐子。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程（ワークショップ開催時）、本稿出版時は国際ファッション専門職大学国際ファッション学部助教。

ゾンビというのはそもそも、これは大きい違いだと思いますが、男女差をなくしてしまった存在であるという点が大事だと思います。それにもかかわらず、女性のゾンビというものが、ある種、ゾンビから人間に戻るのでもなく、ゾンビの可能性を試すような存在として出てきています。スターホークの『スパイラル・ダンス』とゾンビとの関係を簡潔に今述べることは難しいのですが。

久保: 女神に対して祈るとか、女神と合一するみたいな、そういう対象は存在しないというか、しにくい、という感じで捉えて良いですかね、ゾンビの場合。

福田: ゾンビそれ自体を考えた時に、女神それ自体が想定されないものじゃないですか。セクシュアルではないものであるはずなのに、なぜ女性性というものが、最後の可能性みたいな、人間を人間たらしめるものは何かを考えるための感受性のように定義されるのかというのは面白いところだと思います。

久保: われわれの周囲にあまねく内在するとか、女神っていう言葉を抜けば、スターホークのところで結構、ゾンビっぽい表現があるというのは、ここで、多分、グラントさんのお話の中で、サイボーグから **swarm** に行った時にペネトレートとか男性性とかっていう話がどう変わったのかっていうことを質問したかったですけど。要するにトランプは何なんだという感じ。それは、後の議論のところでもまたコメントいただければありがたいと思います。